

オーラル・コミュニケーションのための言語入力 の捉え方について

著者	岩本 一
著者別名	Hajime Iwamoto
雑誌名	dialogos
号	3
ページ	17-30
発行年	2003-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005024/



オーラル・コミュニケーションのための 言語入力の捉え方について

岩本 一

1. はじめに

昨今、学生の「外国人の話しは聴き取れるようになったが、しゃべれない」という悩みをよく耳にする。

これは言語入力の問題である。現在の英語教育は、多聴、多読だけに言語入力を求めて、Listening やReading の時間数を増やしているがあまり効果が上がらないのが現状である。ついには、教師はギブアップし、学生に留学を推める始末である。やはり、言語入力には多聴、多読だけでは不完全である。そこで、現在の英語教育が消極的である模倣や暗記を加える必要がある。

たとえば

現代ラテンアメリカ文学の旗手であるホルヘル・ルイス・ボルヘス（1899～1986）の作品に「砂の木」（1975）という短編集がある。そのなかに「疲れた男のユートピア」と題された一編がある。この物語は、エラドロー・アセバードという英米文学の教授が、ある平原の家で四世紀の間生きてきた男（ある者と呼ばれている）に出会うという話しである。その作品の後半に、「人間はおのれの生の主人であり、またおのれの死の主人になります」という言葉に続いて、二人の間に次のような会話が展開する場面がある。

「それは何にかの引用ですか？」とわたしは訊ねた。

「たしかに。もはや、われわれには引用しかないのです。言語とは、引用のシステムにほかなりません。」

これこそ、まさにジュリア・クリステヴァの「間テキスト性」の概念そのものである。さらに、アリストテレスも、「詩学 (The Poetics)」のなかで、「人間はあらゆる生き物のなかで最も模倣性が強く、模倣からいろいろなことを学び始めるという点である」、と述べていることである。この「引用」こそ「模倣」と同じ概念だと考えられる。つまりクリステヴァの「……あらゆるテキストは引用のモザイクとして構築されている。テキストはすべて、もう一つの別のテキストを吸収、変形したものである」(J. Kristeva 1969, p85) という概念規定に通底する。

私たちは、言語入力の基本は模倣＝引用であるという概念でこの稿を進める。そのプレテキストとして、S. Krashen (1985) と近江 (1996) の「5つの言語・非言語入力」を参考に論考し、さらに、スピーチ・コミュニケーション学がなぜ言語入力に有効であるか論じる。

2. 言語入力^{(2),(3)}

言語入力を二つの方法によって捉えることにする。つまり、無意識的言語入力と意識的言語入力である。

1. Input through Acquisition (無意識的言語入力)

Acquisition (習得) とは、子供が母国語を無意識のうちに覚えてしまうような言語能力の獲得の仕方である。

無意識的入力とは、多聴することによって自然にその言い回しやリズムをつかみ、ことさらに努力して覚えようとするものではない。

(1) 多聴からの無意識的言語入力

Krashen の入力は、素材を意図的に模倣する入力ではなく多聴による無意識的入力である。しかし、ここに次の様な条件が付く。ただ理解するかしないか関係なく聞かせ続けるのではなく、comprehensive input (理解可能なインプット) でなければならない。この点について渡辺 (1988, p5) が次のように紹介している。

我々の言語能力を発達させるインプットとはどのようなものであろう

か。それは現時点の我々の能力より少し上のレベルの材料に接し、それを理解し続けることによって、知的好奇心と満足感あるいは成就感を達成することに役立つようなインプットである。つまり、我々の現在の言語能力が中間的・過渡的レベルの*i* (interlanguageの最初の文字) とするならば、 $[i+1]$ のインプットを理解することにより、我々の言語能力は発達するのである。(この $[i+1]$ を含むインプットをKrashenはRoughly Tuned Inputと呼びFinely Tuned Inputと区別している。) この $[i+1]$ がたとえまだ「習得」していない文法構造を含むものであっても、我々は、すでに「習得」した事柄をはじめ、言語外の情報、一般的知識などのコンテクストを総動員して、その $[i+1]$ を理解できるすばらしい能力を持っているのである。

親や教師は、子供や生徒に $[i+1]$ を含んだインプットを与える際には、いわゆるCaretaker SpeechやTeacher Talkを使って、子供や生徒の実態に合わせて話を組み立てたり、here and nowの原則(なるべく身近な物を使って具体的にということ)で処理できるものに範囲を限定する。つまり、絵や実物、よく知っている事柄などを通じて意味のある場面(meaningful situation)を工夫し、どんどんインプットを与えることが大切なのである。

近江によると、comprehensive Inputに加えて、Incomprehensive Inputも必要である、という。学習者にIndiscriminate Listening / Readingで絶対量与えつづけていると自然にComprehensive Inputに転換していくことが期待できると述べている。たとえば、日本における漢文の素読、門前の小僧の習わぬ経読み、意味も分からず師匠の真似をする日本の芸事の在り方に見られる。

(2) 多読からの無意識的言語入力

24時間、英語が耳に入る外国語生活とは違う条件のもとで言語入力をするには、多読が必要となる。現在、Readingのクラスで学生が触

れるテキストの頁数は70～80ページであり、その中の英語の部分は半分もない。それを一年間（22、3回）、一冊で終るのが現状である。英語学習者は、聞きとりと同じように多少理解できない箇所も無視して、何冊も読みつづけていくうちに、無意識に言語形式が脳裏に記憶されるものである。たとえば、私の娘が留学した時、speakingに悩んでいたが、授業で多聴と家庭での多読で特別にSpeakingの訓練などさせずに、いつのまにかSpeakingが上達していました。

多読からの無意識的言語入力には必要である。

2. Input through Learning（意識的言語・言語入力）

Learning（学習）とは、ある言語を意識的に学んだ結果、言語に関する知識を身につける場合である。

語学は、無意識的習得による入力だけでは上達しない。何はさておき真似、模倣、音読・暗記が必要である。しかし、現在、これらの方法に否定的な風潮がある。一つは、西欧の言語学者たちが、Mim-men Methodのオーラル・アプローチの失敗を模倣が原因であると考えたこと、二つ目は、Communicative approachを身につけた外国人教師が、「物真似」を嫌い、ただ、多聴に重点をおいた指導法をとっているからである。

1. 聞き取りからの意識的言語入力

聞き取りからの意識的言語入力とは、耳から入った英語を覚えようと思って声に出し体を使って行う入力の仕方である。この方法には、Mim-men, Pattern Practice, Substitution, Drillがある。これらは、教師の“Repeat after me,” “Follow me,” “Repeat after the tape”の合図でモデルを真似て、慣れてきたら、変形練習に移るものであった。

真似るという活動を習慣化することによって始めて一貫した「聞き取りからの意識的英語入力」となる。そのためには、次のような活動が考えられる。

- ① 一定の長さの英文のディクテーションを行い、次にモデルのあとに

付けて練習する。そしてその大きな単位のままの文型練習、置き換え練習とする。

- ② 一定の長さの英文を聞きながらメモをとり、そのメモを頼りに聞いた英語の要約スピーチを行う。
- ③ 名朗読などに対して音と意味の関係を鑑賞的かつ批判的に精聴する（批判鑑賞的聴解）ことで、4技能すべての土台となる言語的感性を身につけていく。

以上、Mim-men, Audio-Lingualの活用による英語入力である。

2. オーラル・インタープリテーションからの意識的言語入力

オーラル・インタープリテーションとは、文学作品を知的、情緒的、審美的全体としてとらえ、聴き手に正確に伝える技術である。（Lee & Guara, 1992）

オーラル・インタープリテーションからの意識的言語入力は、活字媒体の英語、つまり、ほとんど通常はReadingの対象として捉えられていた一般の文章である。これを文章の本来の姿である「語り」として捉え、個々の有用な表現、論理の発展のさせ方、そして著者・語り手の心身形態までも含むのである。さらに、この文章は、一定の長さがあり模倣者が自己を見出しやすいためである。

では、approachの仕方の順番を考えてみよう。

(1) 解釈から音読へ

解釈を朗読の形で読み上げる前に、読者は、作品の元話者の意図を正確につかむ作品分析を行い、語り、すなわち音声に迫る。これは、オーラル・インタープリテーションにおける批判的味読の方法である。

(2) 音読から解釈へ

音読は、文章の意味の理解を後回しにして、ひたすら音読し、そのうち暗唱でき、ついには文章の深い内容まで理解していく学習法である。

(3) 手順

では、オーラル・インタープリテーションの意識的言語入力の手順として二つの模倣を考えてみよう。

a) 作品の「なぞりによる模倣」

これは、「批判的味読」の読解法によって行なえば、作品の原文が（自分の潜在表現力として入力される。批判的味読はオーラル・インタープリテーション（＝作品音声解釈）、スピーチ批評、レトリカル批評、文学批評、新批評、分析批評、そして、国語教育における表現読みのいずれにも通ずる深い読みである。

1. 黙読

2. レトリック的な解釈分析

①誰が②誰に③いつどこで④いかなる媒体で⑤何を⑥どういう目的で⑦どういうふに（話の論理的、感化的組立、用語選択など）を調べる。

1、2の段階は沈黙の作業である。

3. 音声身体表現

意味の確認のために行う。

1、2、3が終ると、再び、最初に戻り、くり返す。つまり内容理解領域と音声表現領域との数回の往復により内容理解が深められる。

b) 変形練習としての模倣

なぞりによる模倣をより確かに入力するためには、暗記した文章を変形練習としての模倣とする。その例として、模倣作文（模倣スピーチ）を挙げると、それは一応覚えた原文を、中に出てくるあらゆるエッセンスの連続として捉え、全く別のことを表現してみる練習である。

まず、批判的味読で作品を理解する、つぎに、音声身体表現（音読）を何回か行う。それから、モノログ再生、さらに自分の性別、性格、場所、目的を他のものに想定して表現していく、そのうち、原文の表現を真似ながら、全く別の内容を表現する方法である。この方法の原点は、表現同士のわ

たり具合、論理の発展のさせ方、話の構成の仕方、リズム感、原話者の「心身形態」まで含めての模倣である。

3. 英語での情報整理と心身形態の入力

この入力法は、スピーチ学の諸訓練に属するSpeech, Debate, Discussion, Oral interpretation, Dramaの活用である。

英語での情報整理としてSpeech Debate、そしてDiscussionは、しかるべき英文資料を基に、英語的論理で組み立てて発表練習する過程で、いつの間にか表現そのもののレベルを越え、情報が英語のままが入力が行われる。これはワープロのフロッピーの様に英語的組立てをした情報が盛り込まれているのである。そのうちに、Speech, Debate, Discussion活動をすることで話の組み立て方、問題解決に持っていく行き方などを練習するのだが、それをアウトプット活動というより、Speech, DebateそしてDiscussionの言語形式、思考形式、はては心身形態を入力しているのだという感覚が必要である。

次に、「型」について述べる。「型」は、模倣の末に、心身形態の入力として普遍的原型として認められたものである。したがって、「型」は、心身形態のパターンであり、個々の事例に具現された「らしさ」に相当する。このさまざまな「らしさ」がオーラル・コミュニケーションの諸活動にあり入り乱れて入力され、様々なコミュニケーションの場に出てくるのである。

3. 英語入力になぜスピーチ・コミュニケーション学が有効か

1. LinguisticsとSpeech Communicationは言語形式の捉え方が違う

言語学は、「言語制度説」に立ち、言葉を「ラング」として扱う。つまり、語の制度的意味の研究（意味論）や語の組立規則の研究（統語論）などの様に研究対象が「客観的」な存在であり、個々の主観とは無関係である。そして研究は真理の発見であるという科学観に基づいている。さらに、語用論の分野では、言葉の使用の現場を対象にし、話し手という主体の態度や意思を考慮しなければならないとしているが、これも、語の意味や文法につい

での客観的制度に他ならない。結局、語用論の研究対象は、あくまでコミュニケーションのための現場のルールの研究になっている。

スピーチ・コミュニケーションは、時枝（1956）やLennebergらに代表される「言語過程説」を土台にしている。これは、ソシュールのパロールの概念、つまり言語を制度として捉えるのではなく、語ったり、「読んだり」する活動それ自体として捉えた。言い換えると、言語は人の外側にある客観的規約ではなく、各人のそのつどの思想過程の表現（と理解）という「主体的活動」である。

では「パロールとは何か」について述べると、発話が、相手（自分自身）や場面を意識した目的達成行為としてなされた時の発話に対する呼び名である。

そこで、言葉は、あくまでも人に使用される時に、意味と方向性が決まる。つまり、パロール（＝語り）として捉えるべきである。

スピーチ・コミュニケーションが、「言語過程説」を土台にしており、ソシュールのパロールの概念を対象としているならば、パロール（＝語り）は、目的達成行為、コミュニケーション行為である。したがって、スピーチ・コミュニケーション学は、英語入力に有効である。

2. レトリック的視座に立つ

レトリック的視座は、コミュニケーション行為を見る際の基本的な観点である。

1. 誰が (WHO) ——Source
2. 誰に (TO WHOM) ——Receive
3. いつ、どこで (WHEN, WHERE) ——Occassion, Setting, Space
4. いかなる媒体で (THROUGH WHAT CHANNEL) ——Channel
5. 何を (WHAT) ——Message
6. どういう目的で (WHY) ——Purpose
7. どのように (HOW) ——Logical / Affective

structure and other verbal and non-verbal features

8. どういう効果で (WITH WHAT EFFECT) — Effect

レトリックとは、コミュニケーション目的を達成するため取るのが可能な手段である。したがって、上の観点でコミュニケーションを見ることがレトリック的視座に立つことである。

では、レトリック視座に立つことがなぜ英語入力に有効なのか。それは、声を出している自分が誰で、誰に向かって……などの意識がはっきりしておれば、力の入れようが違うから迅速に覚えることができる。したがって、英語入力の効率が良くなる。

3. 活字媒体の英語もパロール (=語り) である。

活字媒体の言葉もパロール (=語り) である *Sermo* という概念を見れば理解できる。澤田 (1983) によれば、*Sermo* とは、エラスムスがヨハネ福音書の冒頭句のギリシャ語のなかで使ったものである

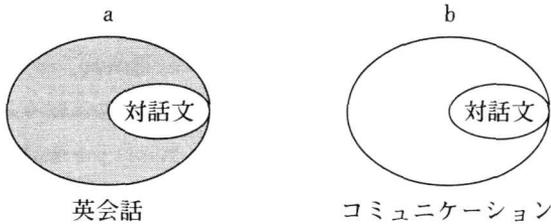
原文 *en arche, en hologos*

新ラテン語訳 *in principio erat sermo*

その意味は、単なる断片的単語とか短い発言としてではなく、神の御心の絶えざる語りかけという意味である。

このように、レトリック視座から捉えた活字媒体の言語は、パロール = *sermo* = (音声身体言語行為) として英語入力に有効である。さらにこの概念を広げると、哲学者の随筆の一節もモノログとして、また、*Speech*、*Debate*、*Discussion*、*Oral Interpretation*、*Acting* 等のスピーチ・コミュニケーションの諸活動も文学に限らず、活字媒体によるもので英語入力の対象となる。

最後に、活字媒体をパロールとして捉えるには、「視点」が問題になる。「視点」とは語り手/書き手が物事を見る、目の高さのようなものである。では、*Parole* と *sermo* の範囲において、英会話とコミュニケーションを比較/対照してみよう。



斜線部はparaleとsermoとして音声の光が当たっていない部分である。

- a. 英会話：対話文以外は単なるReading教材として話題提供である。
 b. コミュニケーション：活字媒体の言語はsermoとしてレトリック的視座に立って捉えられ、音声の光が当たっている。したがって視点も英語入力に有効である。

4. パロール（＝語り）は中心がある空間（非ニュートンの空間）である。すべての活字媒体の英語には、コミュニケーションが行なわれている具体的な空間がある。なぜなら、活字媒体の英語は、パロール（＝語り）であり、語り手と聞き手がいる空間だからである。具体的な空間とは、文章そのものに組み込まれた空間である。その空間を考える場合、誰の目を通して見たかによって空間の形が違ってくる。

では、㊤演技者にとっての空間と㊦オーラル・インタープリターにとっての空間について述べる。

㊤演技者にとっての空間とは、ある役を演ずる俳優の立場に身においた際に、俳優を中心に広がる空間である。

㊦オーラル・インタープリターにとっての空間とは、作家の立場に立って作品を解釈し、読者（観客）にその作品を聞かせる人が中心に広がる空間である。しかし、大切なことは、作家の視点に立つが、自分はあくまで自分である、ということである。

次に、中心がある空間（非ニュートンの空間）が英語入力活動になぜ有効かと言えば、それは、声を出す場合、まずテキストに対して自分の立場（オーラル・インタープリターなのか演技者なのか）を決定し、その自分を

中心にどういう空間が広がっているのかを意識して声を出し、体を動かすから英語入力が促進されるのである。

4 おわりに

以上、私たちは、無意識的言語入力、意識的言語入力そしてスピーチ・コミュニケーション学がいかに言語入力に有効であるかを述べてきた。しかし、現在の英語教育は、教授法以前の問題が山積している。文部科学省の小中学生に対する“ゆとり教育”は、高校、大学にも悪い影響を及ぼしている。

たとえば、スピーキング学習の一端として英語入力を考えた時、次の様な傷害に直面する。

1. 「教科書の英文のListening、音読、暗記」を学生が嫌がる。
2. 「Reading/Writingの宿題を課す」と学生が文句を言う。
3. 「テキストがむずかしすぎる」と学生の不平不満のオンパレードである。

教師は学生が嫌がったり、不平不満を聞くと指導（新しい教授法）すべてを放棄する。では、コミュニケーションのための英語入力はどうなるのか？

ブルームフィールド（1942）が、「外国語学習はハードな学習である。それ以下のものはすべて無意味である」と述べている。アメリカの大学・大学院では、毎日、Reading/Writing Assignmentが課されている。日本では、教師は、学生が嫌がるからといって多聴、多読、音読、暗記の宿題を避けている。どうして英語入力を果すことができるのか、「学生はすでに音をあげている」、「能力差を考えるべきだ」、「押しつけてはいけない」など社会風潮がスピーキング学習の障害となっている。英語入力を、学生を留学させることで解決しようとしている学校が増加しているのが現状である。来週、NHKで名作「おしん」が再上演されることになった。英語学習者に「忍耐」とは何か、教える方が、いかなる教授法よりも有効であろう。

最後に、英語入力に有効な教材が問題点となる。現在英語コミュニケー

ション学界では、教材は対話文が全盛である。対話は結果であり、英語入力に有効な方法ではない。なぜなら、対話（会話）文では、批判鑑賞的聴解や批判的味読の教材に適用し難いからである。あえて対話文を教材にするなら、良質の戯曲を与えること。そして英語教育用に、作戯法に叶ったダイアログやモノログを普及させることである。その際、対話文の分析法をドラマやオーラル・インタープリテーション、スピーチ分析の方法から開発し、それを教材処理に応用することが重要である。

注

1. 土田知則「間テキスト性の戦略」夏目書房、2000、pp9～34
2. 近江 誠「英語コミュニケーションの理論と実際」研究社、1996、pp73～90
3. 近江 誠「オーラル・インタープリテーション入門」大修館、1992、pp294～311
4. Ibid., pp90～106

参考資料

1. 近江 誠「英語コミュニケーションの理論と実際」研究社、1996
2. 近江 誠「音声訓練の方向性——非ニュートンの空間からのこころみ」間隆堂、1992
3. 近江 誠「頭と心と体を使う英語の学び方」研究社、1988
4. 近江 誠「オーラル・インタープリテーション入門」大修館、1992
5. 渡邊時夫他著「インプット理論の授業」三省堂、1988
6. 土田知則「間テキスト性の戦略」夏目書房、2000
7. 柳瀬陽介「模倣の原理と外国語学習」広島修道大学総合研究所、1994
8. 澤田昭夫「論文のレトリック」講談社、1983
9. S. D. Krashen, *The Input Hypothesis : Issues and Implication*, New York

: Longman 1985

10. 橋本満弘他著「英語コミュニケーションの理論と実際」桐原書店、1996

